

# 目標と評価

－ 中学国語教材 小説『故郷』（魯迅・竹内好訳）の試み －

尺田 慎一（鈴峯女子中学・高等学校）

## 1 はじめに

新学習指導要領には、国語授業を実践するにあたり、「指導と評価の一体化」、「目標に準拠した評価」を明確に提示し、評価のための評価に終わらせることなく、その後の指導に生かす必要が述べられている。

本論では、研究仮説として中学国語の文学的教材『故郷』（魯迅・竹内好訳）を用いて、「ことばの教育」に重点をおいた「目標と評価との一体化」をめざす授業展開を考察したい。評価規準表を学習者（生徒）に示しながら、言語能力育成を目指す。目指す言語能力がおおむね満足していると判断されるためには「何が」「どの程度」達成していればよいかを示し、その結果を生徒に返して次の学習に役立たせたい。「目標と評価」の明確化により、教科の基幹といわれる「ことばの教育」の定着につながればと願っている。

## 2 目標と評価との一体化をめざす題材の研究仮説

各時間の学習目標・到達度目標と評価規準を具体的に示すことで学習者の主体的な学習を目指すことができるのではないか。

教材の本文の語句を根拠に、人物の言動を押さえ、その奥にある考え方・生き方を推論できるのではないか。

「わたし」と「ルントウ」との間に厚い壁を感じた。自分が主人公ならば、現代社会を生きるわれわれはどのような問題としてとらえるか。「社会的立場・境遇を越えて友情は復活するのか。」自分の人生問題として考えることができるのではないか。（本論ではこの の授業展開は省略）

## 3 対象生徒・実施日・教材名

対象生徒： 鈴峯女子中学校三年A組 24名（女子）

実施日： 2007年 1月9日～1月30日

教材名： 『故郷』（魯迅・竹内好訳） 光村図書 国語3

## 4 教材観と生徒の実態における学習意義

『故郷』は中国の文学者、思想家、魯迅の小説集の『呐喊』（1923年刊）に収められている14集の一つである。この小説は辛亥革命による社会混乱を舞台にしているが、『故郷』は都会生活になじんだ「わたし」が、家を明け渡すために、二十年ぶりに故郷に帰ったときの現実をみごとに描き出した作品である。故郷とはいったい「わたし」にとってどういうものなのか。その故郷で出会ういろんな人物から、場面ごとに「絶望」と「希望」の感慨を抱く。田園風景を舞台にしながら、「わたし」にとって神秘の宝のようにあこがれ、希望の対象であった農村の少年が、生活苦・身分社会の中で、疲れ切った姿に変わり果ててしまっていた。でくのぼうのような人間になっていた。

学習者にとってこの『故郷』の問題は他人事ではない。「むだの積み重ねで魂をすり減らす生活」「打ちひしがれて心が麻痺する生活」「やけを起こして野放図に走る生活」に変わってしまった村人や幼友達の生き方を考えることは意義あることである。久しぶりに会った幼友達と心の隔絶状態（自由に口がきけなくなる）になったとき、以前のような友情は果たして復活するのだろうか。学習者自身の問題でもある。

この『故郷』の本文最後のところで、「希望」について「思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」と結んでいる。この考えは、魯迅の思想と行動の根底にあって、「誰かが歩かなくては道ができない」と自らが実践した人である。

## 5 目標と評価との一体化をめざす指導の実際

### (1) 各時間の指導目標と過程(全6時間)

【第1時】本時の学習目標：全文通読前に『「時」を基準に5つの場面に分けることを予告』し、全文通読後に補助プリントに記入させる。全文初読の感想(印象・疑問・他)をまとめる。

「帰郷」「思い出の回想」「ヤンおばさん」「ルントウとの再会」「離郷」次回予告：<場面ごとの構成 対比 情景描写 人物描写 の言語表現の技法読み取りを通して主題に迫ろう。>

【第2時】第1場面の学習目標：冒頭文(帰郷の場面)から読み取れることを根拠をもって説明しよう。

(「わたしの心情」風景描写は心情の投影) 冒頭部分

「<sup>(1)</sup> 厳しい寒さの中を、<sup>(2)</sup> 二千里の果てから、<sup>(3)</sup> 別れて二十年にもなる故郷へ、<sup>(4)</sup> わたしは帰った。」

(1) 厳しい寒さの中を?(季節は)

(2) 二千里の果てとはどこだ?(場所は)

(3) なぜ二十年も故郷へ帰らなかったのか(なぜ)

(3) わたしとはどんな人物か?(誰が)

(4) 厳しい寒さの中をわたしは何のために帰ったのか 主人公が直面していた問題は何か?

(どうしたのか)

#### 【生徒の解答例】

最初の書き出しの「厳しい寒さのなかを」のところで故郷がとても寒いということがわかりました。もう真冬の候とも書いてあったので、真冬ということもわかりました。別れて二十年にもなる故郷に、徐々に帰るのだから、ワクワクする気持ちと不安な気持ちがあったと思います。だけど、「今度の帰郷は決して楽しいものではない」とも書いてあるので、主人公の私はあまり喜んでいないように感じました。故郷に帰るのに楽しみがなぜないのか気になりました。「故郷に別れを告げに来たのである」と書いてあるから、故郷と別れたくない気持ちがあるんだと思いました。また「私の覚えている故郷はまるでこんな風ではなかった」と何か故郷に期待していたものがあったからだと思います。今まで二十年もの長い間、故郷に帰らなかったのは、故郷に帰ったら気が緩んでしまうからだと思います。今、暮らしを立てている異郷の地は、あんまり住み心地がよくないと思います。家族もいないし、もしかしたら奥さんもいないし、昔からの友人もいないし・・・私にとって異郷の地はつらいところだと思います。(Aさん)

【第3時】第2場面の学習目標：「美しい故郷を見た思い」の内容を読み取り、その様子をどんな語句で表現しているかを理解する。

【第4時】第3場面の学習目標：「ヤンおばさん」人物像を語りの眼はどのように表現しているか。「ヤンおばさん」の会話(ことば)にこめられている気持ちを読み取る。三十年前と現在のヤンおばさんと違いはどこから生まれたのか。

【第5時】第4場面の学習目標：幼なじみのルントウとの三十年ぶりの再会の場面を読み取る。三十年ぶりの変化と「わたし」と「ルントウ」の悲しむべき厚い壁の原因を推論・論証する。

【第6時】第5場面の学習目標：「ホンル」のことばの意味、現実の故郷の実態「むだの積み重ねで魂をすり減らす生活、打ちひしがれて心が麻痺する生活、やけを起こして野放図に走る生活」のなかで「互いに隔絶することのない人間関係」をつくることを生徒自身の問題として考える。

(2)【第5時】の授業展開と板書

評価規準、ループリック方式で以下のような評価表をもとにして「5」「4」「3」「2」「1」のような評価を原則とした)

5 秀	4 優	3 良	2 可	1 不可
背後にある事実を推論している。	意見を述べ、根拠となる具体例をあげ、論証している。	意見を述べ、根拠となる具体例をあげている。	意見を述べているが、根拠となる具体例をあげていない。	自分の考えがまとまらない。

学習課題：評価規準表に準じて、「わたし」と「ルントウ」との「悲しむべき厚い壁」の原因を記述させる。(第4場面を範読後、直ちに「厚い壁の原因」を記述させる。プリント回収後、その評価プリントを返却し下記の発問を順次しながら、板書のような授業を展開した)

評価	5 秀	4 優	3 良	2 可	1 不可
人数	0	18	2	3	0
割合	0 %	78 %	9 %	13 %	0 %

【生徒の解答例と評価例】

昔は互いに「ルンちゃん」「シュンちゃん」と呼んでいて、兄弟の仲だったのに、何十年ぶり再開したとき「だんな様」と呼ばれたことに、兄弟の仲が壊れたと感じ、私は身震いしたんだと思う。私は立ち上がって迎えて昔のように親しい感じでむかえたのに。(4 優)

厚い壁を感じた理由は、「だんな様」と呼ばれたこと、本人同士の地位が違うからそういったんだと思います。(4 優)

「だんな様」と言われて口がきけなかったのは久しぶりにあってなんといつてよいかわからなかったから「3 良」

久しぶりにあったけど、相手の変わりようにびっくりしていた。だから気まずかったから(2 可)

【板書例】

□ 第四場面  
ある寒い日の午後

母  
10 持っていかなぬ話物はみなくてやるさう、好きなように選ばせよう  
8 「まあ、なんだってそんな他人行儀にするんだね。  
おまえたち、昔は兄弟の仲じゃなにか。昔のよう、  
シュンちゃん、でいいんだよ。」と、母はうれしそうに言った。

わたし  
(地主の息子)  
推 子たぐさん、凶作、重い税金、兵隊、匪賊、役人、地主  
論 みんな寄ってたかつて彼をいじめて、てくのぼうみたいな人間にしまったのだ。  
わたしは口がきけなかった。  
5 悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまった。  
身震いしたらしかった。

2 「ああルンちゃん、よく来たね……。」  
(会話)  
1 感激で胸がいつぱいになり、思案がつかぬままに、  
急いで立ち上がった。  
(動作)

3 突つ立つたままだつた。  
(動作)  
唇が動いたが、声にはならなかった。  
(気持)

4 うやうやしい態度が変わつて、はっきりこつと言つた。  
(会話)  
「だんな様……。」  
(会話)

9 彼は首を振るばかりだつた。(暮らして向來)  
……世間は物騒だし……さうさか向いても金は取られまじたい、  
決まりもなにも……作柄もよくございませぬ。作った物を売りに行けば  
何度も税金を取られて、元は切れるし、さうかといつて売らなければ、腐らせるばかりで……。

ルントウ  
(使用者の息子)  
現在の容姿  
背丈は倍ほどになり  
今では黄ばんだ色に変わり  
深いしわがたたまれていた  
周りが赤くはれている  
頭には古ぼけた毛織りの帽子、  
身には薄手の綿入れ一枚、  
全身ぶるぶる震えている。  
紙包みと長いきせるを手に提げている。  
太い、節くれだつた、しかもひび割れた  
松の幹のような手で

上記板書のように、 部分を生徒に発問しながら整理し、板書していった。

T：この場面の登場人物は？それぞれその人物の動作、気持ち、会話は？1～4に語句を入れよう。

T：「ルトウ」は三十年ぶりにあったのによくわかったね。容姿はどうだった？

T：「急いで立ち上がる」はどんな行動？

P：友を迎える喜び、親しさ、客に対する礼儀

T：「突っ立ったまま」動作はなぜ？何を表現しているか？

P：喜びと寂しさで思案

T：「あぁルンちゃん よく来たね……」に続く会話は？

T：「だんな様！ ……………。」

T：その後、私はどんなしぐさ・気持ちになった？それはなぜ？

T：その背景を推論しよう。

T：「会話」、「動作」、「気持ち」表現の工夫はどこになされているか？

P：対比

T：評価プリントで「5 秀」の評価がつかなかったのは推論が不足していたね。「社会不安、子たくさん、重税など背景」の部分が述べられていないからです。

## 6 この評価表の利用した授業の生徒の感想

いつも何気なく書いていたが、今回は規準が決められていて書いてみて、いつもより大人の意見を述べられたと思う。

評価基準表があったから、難しいけれど、書く順序がわかって良かったです。もう少し簡単な表現にしてもらいたいです、

この5段階の評価は、今自分がどのくらいの文書が書けているかわかって良かった。しかし、推論や論証に意味がいまいち分からないのもう少し説明書きがほしい。

表は示してあるけれど、点数が低いといやだ。すごく考えて頑張って書いたのに低い点をつけられたらいやだ。

簡単な文書でいいから、例を書いてほしかった。

## 7 まとめ

学習目標・到達度目標と評価規準を具体的に示すことで学習者の主体的な学習を目指した。生徒は学習目標の趣旨は理解してくれていたものの、指導者の説明不足もあって、より具体的な解答例の提示が必要であることがわかった。点数表示されるのにも抵抗感があったようだ。数字がそのまま通知表の評定を連想したのかもしれない。評価規準を立てておりながら「5 秀」に到達生徒がいないことは指導過程の課題を示している。

教材の本文の語句を根拠に、人物の言動を押さえ、その奥にある考え方・生き方を推論を目指した。本文語句に以前より注意して読解しようとする気持ちが芽生えたことがうかがわれる。板書により「動作」「気持ち」「会話」にこめられている「ことば」に注意した。生徒は二人の人物の「会話のことば」「動作」が対比的表現されていることにも気づいた。

今後さらに「目標に準拠した評価」を明確に具体的例を授業前に提示し、評価のための評価に終わらせることなく、その後の指導にも生かす取り組みを重ねていきたい。